

2012年04月09日

トヨタ自動車、 「もっといいクルマづくり」の具現化に向けた取り組みを公表

トヨタ自動車(株)(以下、トヨタ)は、2011年3月にトヨタグローバルビジョンを発表し、「もっといいクルマづくり」に向けた体制の改革を行ってきた。今回、新たな取り組みとして、大幅な商品力向上と原価低減を達成するクルマづくりの方針「Toyota New Global Architecture」(以下、TNGA)の車両開発への導入を公表。また、これまでの取り組みとして「チーフエンジニアの権限強化」、「地域ニーズに沿ったいいクルマづくりに向けた体制改革」などについて、あわせて公表した。

1. 「Toyota New Global Architecture」

「走る」「曲がる」「止まる」といった運動性能はもちろんのこと、ドライビングポジションなどの人間工学やデザインの自由度を追求した新しいプラットフォームを開発し、世界の各地域で共用化することで、高い基本性能を備えたクルマを効率よく開発。

新型プラットフォームは、設計とデザインが協力してクルマの骨格改革に取り組むことで重心を低く構え、踏ん張り感あるスタイリングなど、これまでになくエモーショナルなデザインと優れたハンドリングのクルマの開発を可能とする。

あわせて複数車種の同時企画・開発を行う「グループ開発」を導入し、車種間の基本部品・ユニットの共用化率を高めることで、仕入れ先との協力とあわせて原価低減を可能とする。開発の効率化や部品・ユニットの共用化が進むことにより、開発工数やコストをお客様の嗜好や地域の特性に関わる部分の開発に振り分けて差別化を図り、さらなる商品力の向上を図る。

なおTNGAは、3種類のFF系プラットフォームから取り組む方針。この3種のプラットフォームを採用する車両の合計生産台数は、トヨタの総生産台数の約5割をカバーする。

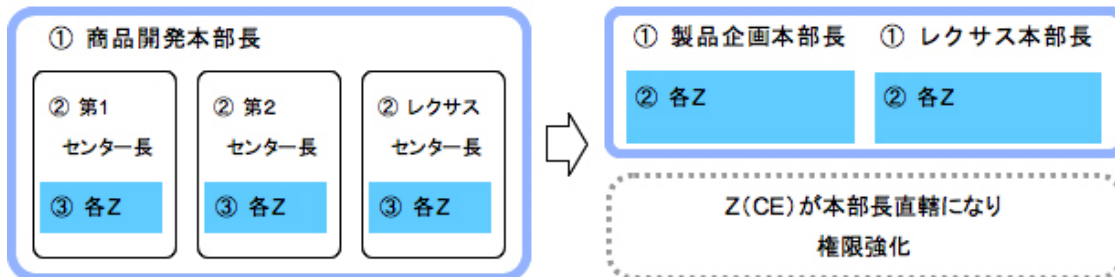
2. (1)R&D体制の強化

◇チーフエンジニア(CE)の権限強化

- CEの位置付けを「お客様に一番近い開発総責任者」として明確化し、従来のセンター制に分かれていた体制から、製品企画本部長直轄として意思決定を迅速化。CEがお客様のことを考えながら、持続的・継続的に担当商品群を良くしていく組織とした。

<従来>

<改革後・2011年から>



Z: CEがリーダーの、車種ごとの開発推進組織

- 車両開発の責任者はCEとする一方で、各車両に織り込む個別技術については、実験、ボディ、シャシー、パワートレインなどを担当する各技術領域が責任を持つ体制とし、CEが目指す「いいクルマ」の基盤となる専門技術の蓄積と先行開発を強化する体制とした。

◇地域ニーズに沿った「もっといいクルマづくり」をするための体制強化

- 各地域のR&D拠点の強化とあわせて、製品企画本部内に①北米・中国、②日本・欧州、③新興国(ロシア・アジア・豪州・中近東・中南米・アフリカ)の3地域の地域統括部長を配置。各地域の営業部門や研究開発拠点と連携して、地域ニーズに沿ったいいクルマづくりを追求。「車両開発の責任者はCE」、「地域からの要望等を集約するのは地域統括部長」と役割を明確にし、両者が連携することで、よりスピーディーに地域ニーズに対応できる体制とした。(トヨタブランド)

- レクサスブランドは、世界共通のブランド思想に基づいた車両開発を推進。

(2)デザイン体制の強化

- 社内で車両デザインを評価・検討する「デザイン審査」への出席者を少人数に絞り込み、車両の開発責任者であるCEが主役となるプロセスを導入。

トヨタは、トヨタグローバルビジョンに基づき、「いいクルマづくりを通じて、豊かな地域社会づくりに貢献し、『いい町・いい社会』の一員として受け入れられる企業市民を目指す」ことを念頭に、これからもお客様の期待を超えるクルマづくりに取り組んでいく。

